

Title	< 一般演題抄録 > 当科における甲状腺乳頭癌治療の現状と課題
Author(s)	西, 隆; 井川, 明子; 西村, 顕正; 袴田, 健一
Citation	弘前医学. 68, p.89. 2017
Issue Date	2017-10-05
URL	http://hdl.handle.net/10129/6160
Rights	
Text version	publ isher



<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

- II-5 視線検出装置 (Gazefinder) を用いた ASD 早期診断の有用性の検討
 ○齊藤まなぶ¹⁾ 坂本由唯²⁾ 吉田和貴²⁾ 柞木田なつみ²⁾
 松原侑里²⁾ 吉田恵心³⁾ 足立匡基³⁾ 高橋芳雄³⁾ 安田小響³⁾
 栗林理人³⁾ 中村和彦²⁾³⁾
 (弘前大学医学部附属病院神経科精神科¹⁾
 弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座²⁾
 弘前大学医学部附属子どものこころの発達研究センター³⁾)

- II-6 当科における甲状腺乳頭癌治療の現状と課題
 ○西 隆、井川明子、西村顕正、袴田健一
 (弘前大学医学部附属病院 消化器・乳腺・甲状腺外科)

東日本大震災を契機に発生した原発事故と甲状腺癌との関連が取り沙汰され、世間の注目を集めている。そこで、当科における甲状腺乳頭癌治療の現状と課題について検討した。

平成 12 年 4 月から平成 28 年 6 月までに当科で行った甲状腺癌初回手術症例数は 525 例であり、その内訳は乳頭癌が 460 例 (87.6%)、濾胞癌 20 例 (3.8%)、低分化癌 25 例 (4.8%)、未分化癌 4 例 (0.8%)、髄様癌 8 例 (1.5%)、その他 8 例 (1.5%) であった。乳頭癌の全生存率は 10 年 95.5%、無再発生存率は 10 年 82.5%、病期別では病期 I 90.0%、病期 II 0.0%、病期 III 83.8%、病期 IV 67.1% であった。これは他施設と比較しても遜色のない成績であり、甲状腺乳頭癌の「再発しやすいが死なない」といわれる性格を改めて示した結果であった。

甲状腺関連手術件数は増加傾向にあり、この 10 年間で約 2 倍に増加した。しかし、当科関連施設全体では年間 120 例前後で推移しており、当科での伸びが突出していた。紹介患者数の増加も目立ち、平成 24 年 4 月を境に前後 4 年間で前後期に分けて比較すると、院外で 2.34 倍 (前期 159 例 / 後期 372 例)、院内で 2.96 倍 (79 / 234) の増加が見られた。地域別にみると秋田県からの紹介数が 2.63 倍 (8 / 21) と増加しているのが目立った。青森県内では弘前市で 2.15 倍 (96 / 206)、青森市 4.00 倍 (10 / 40)、五所川原市 2.57 倍 (14 / 86)、黒石市 5.20 倍 (5 / 26) であり、都市部からの紹介患者が増加していた。

当科での甲状腺関連手術症例数増加の理由としては、甲状腺手術を行う施設が減少した結果と考えられた。東日本では甲状腺手術を消化器外科が担当することが多い (西日本では耳鼻科) が、消化器疾患に比べて症例数が少ない割に、反回神経麻痺など面倒な合併症が起こることがあり、手術が敬遠されているものと推測される。大学病院一極集中の改善のためには、局所進行例や再発例などの難治症例を当科で担当する一方、早期症例を他施設に紹介するなどの、他医療機関との役割分担の構築が重要である。

- III-7 ウイルス感染と胆道閉鎖症—CCL5 の意義—
 ○島田 拓^{1,2)}、木村 俊郎²⁾、早狩 亮¹⁾、松宮 朋穂¹⁾、
 吉田 秀見¹⁾、今泉 忠淳¹⁾、袴田 健一²⁾
 (弘前大学大学院医学研究科 脳血管病態学講座¹⁾、
 同 消化器外科学講座²⁾)

- III-8 バレーボールによる膝前十字靭帯損傷の受傷状況調査
 ○菊田祐希子¹⁾ 木村由佳¹⁾ 佐々木静¹⁾ 奈良岡琢哉¹⁾
 山本祐司¹⁾ 津田英一²⁾ 石橋恭之¹⁾
 (弘前大学大学院医学研究科 整形外科学講座¹⁾
 弘前大学大学院医学研究科 リハビリテーション医学講座²⁾)